

『四天王寺秘密記』の成立年代について

伊藤 純

一 はじめに

大阪府立中之島図書館に『四天王寺秘密記』（以下「秘密記」）なる書物が所蔵されている（架蔵番号・大阪室／136／42）。『補訂版国書総目録』四卷（岩波書店一九九〇年）には

四天王寺秘密記 一冊 ①寺院 ②大阪府

とあり、中之島図書館本が唯一の写本であることが分かる。そのためか四天王寺の研究においてこの「秘密記」に言及したものを目にしたことがない。¹⁾

「秘密記」の巻頭には

此書は四天王寺之由来大秘密をあらわしたる書也。

故に此書を見る者、心を慎み、拝見すべし。もつとも若少寸成に人或は物事戯とならず。人酒宴遊興乱傷少□^{トモガウ}もしは往還或は入込、人集の処にて卒尔に見すべからず、見るべからず。人にかたるべからず。仮にもいたずらに見るべからず。此書は天下泰平国家安穩の為と有るからは、諸人のため我々が祈祷のため建立ありし処なれば、深く尊敬して諸人によみ

□かせば、此則三世のたすけとなるべき而也。

慶長十八癸丑三月日

とあり、巻末の奥書には「文化八辛未八月 栗生氏」とある。

これを信じれば、「秘密記」は一六一三年（慶長一八）

に成立したもので、中之島図書館本は一八一一年（文化八）に書写されたことになる。しかし、一見して本書が一六一三年に成立した書とは到底思えない。かと言って「秘密記」を見捨てることは残念である。「秘密記」の内容を検討することにより、成立年代にせまることができれば、この書も四天王寺研究の一材料になるのではと考えるものである。

二 「秘密記」の概要

「秘密記」は縦二四cm・横一七cm、本文三〇丁からなる書である。二九項目にわたり建物や行事について記述される。二九の項目を記述順に示すと以下のとおりである。

- 1 勝鬘院
- 2 宝塔
- 3 薬師堂（椎ノ寺）
- 4 普門院
- 5 文殊堂（食堂）
- 6 六時堂
- 7 講堂・西鐘楼堂・東鼓楼堂
- 8 金堂
- 9 五重ノ塔
- 10 亀井水
- 11 東大門
- 12 宝楼堂
- 13 湯屋之方丈
- 14 御供所
- 17 太子堂宝殿
- 18 御絵堂
- 15 三昧堂
- 16 聖霊院
- 19 二王門・南大門
- 20 庚申堂
- 21 万塔院
- 22 五智光院・西重門
- 23 経堂（輪蔵）
- 24 西門・

- 北引声堂
- 25 南短声堂
- 26 石鳥居
- 27 安居天神
- 28 一心寺
- 29 惠美須（今宮）

14、17、18、15、16、19の順序は異常であるが、「秘密記」はこの順で

回廊	食堂	東大門	西大門	北大門
瓦葺、80間	瓦葺、7間二面庇	瓦葺、3間	瓦葺、3間	瓦葺、3間
	3間・7間			
桁行京間130間4尺5寸 梁行京間2間	桁行京間10間1尺4寸 梁行京間5間1尺	桁行京間6間1尺 梁行京間4間	桁行京間5間 梁行京間3間	
桁行130間1尺 梁行2間	桁行10間2尺2寸 梁・5間1尺1寸	桁行6間8寸 梁行3間5尺4寸	桁行5間2尺5寸 梁行3間2尺3寸	
桁行京間150間4尺余 梁行5間1尺	桁行京間10間1尺余 梁行5間1尺	桁行6間1尺 梁行4間	桁行5間 梁行3間	桁行京間2間5尺 梁行2間1尺5寸
記述なし	桁行10間2尺2寸 梁行5間1尺1寸	桁行6間8寸 梁行3間5尺4寸	桁行5間2尺5寸 梁行3間2尺3寸	

「秘密記」はこの順で記述されている。おそらく「秘密記」の書写段階でのミスであろう。14項目の最終行で丁が終わり、一丁飛ばして捲つてしまい、17・18目の項目を14に続けて写してしまい、その直後にミスに気づき、前に戻つて、18の後に15・16項を書き、19項につなげたと思われる。

各項目では、まず建物の規模が記述される。続けてその項目とは直接関係しないような内容が続く。男女・陰陽の関係で文章が綴られるセクシヤルな内容である。全体を俯瞰すると何とも怪しげな内容である。

したがって、セクシヤルな部分の記述を検討しても「秘密記」の成立年代に迫れないと思われる。「秘密記」に記された建物規模の数値を他の史料と比較することによって「秘密記」の成立年代に迫れないだろうか。

三 他史料の主要建物規模の記述と「秘密記」の記述との比較

四天王寺は創建以来、今日まで度々焼失し、再建が繰り返されてきた。近世以降には再興された新伽藍の建物についての記録がある。「秘密記」の成立年代を探るために以下の史料の建物規模の数値との比較を試みたい。比較した史料は以下のとおりである。

- 一〇〇七年（寛弘四）『御手印縁起』（以下「縁起」）。
- 一五九四年（文禄三）「秋野房文書」²⁾（以下「秋野房」）。
- 一六二三年（元和九）『天王寺御建立改渡帳』³⁾（以下「改

表 1

	南大門	中門	塔	金堂	講堂
1007／縁起	瓦葺、重層、5間	二重、瓦葺、5間	五重、瓦葺	二重、瓦葺	瓦葺、8間
1594／秋野房	5間	5間・2間	3間四方		5間・7間
1623／改渡帳	桁行京間8間四足 梁行京間3間2尺5寸	桁行京間9間2尺5寸 梁行京間3間4尺5寸	京間3間5尺四方 高24間3尺	桁行京間10間 梁行京間8間半	桁行京間13間1尺 梁行京間9間2尺
1685／法事記	桁行8間5尺 梁行4間1尺	桁行9間4尺 桁行3間4尺5寸	京間3間5尺四面	桁行京間8間6尺2寸 梁行京間7間5尺7寸	桁行13間1尺2寸 梁行9間3寸
1704以降／寺誌	桁行8間4尺 梁行3間2尺5寸	桁行9間 梁行京間3間4尺5寸	京間3間5尺四方 高24間3尺	桁行10間 梁行8間半	桁行京間13間1尺 梁行9間2尺
?／秘密記	桁行8間5尺 梁行4間2尺	桁行9間4尺 桁行3間4尺5寸	京間3間5尺四面	桁行京間8間6尺2寸 梁行7間5尺7寸	桁行13間1尺2寸 梁行9間3寸

渡帳」。

一六八五年（貞享二）『四天王寺年中法事記』⁴⁾（以下「法事記」）。

一七〇七年（宝永四）以降に成立した『天王寺誌』⁵⁾（以下「寺誌」）。

表1は伽藍の中心建物について、これらの史料と「秘密記」の記述を比較・整理したものである。

一見して分かるのは、「秘密記」と「法事記」（一六八五年）の記述は、南

大門の数値、南大門「秘密記／梁行四間二尺」↓「法事記／梁行四間一尺」を除いて、その他は一致している。違いは南大門の数字、梁行の二と一の記述のみである。どこかの段階で「秘密記」「法事記」のどちらかの誤記、ミスによって生じたと考えて差し支えないであろう。このことから「秘密記」と「法事記」とは極めて近接した関係にあることは明らかである。

四 「秘密記」と「法事記」の比較

表1は主要建物のみであったので、より詳しく「秘密記」と「法事記」の内容を比較するために、全ての建物規模の数値の比較を行ってみたのが表2である。

「法事記」は「四天王寺伽藍の来歴、法事・縁起を説明し、一卷としてまとめ、貞享二年二月、大坂天満紙屋勘兵衛から開板（出版）したもの。…（中略）…内容は伽藍図、諸堂の間数、法事の日録のあと、堂舎仏閣ごとに、尊像や来歴、それに各年中の法事」が書かれたものである。⁶⁾

建物の規模は「諸堂の間数」の項目に記述される。記

述された建物の順序は以下の通りである。

- | | | | | | |
|--------|-----------|--------|--------|--------|-------|
| 1 金堂 | 2 宝塔 | 3 二王門 | 4 西重門 | 5 廻廊 | 6 講堂 |
| 7 鐘楼 | 8 鼓楼 | 9 楽屋 | 10 舞台 | 11 六時堂 | 12 食堂 |
| 13 湯屋 | 14 東僧坊 | 15 西僧坊 | 16 東大門 | 17 宝藏 | |
| 18 亀井堂 | 19 御供所 | 20 三昧堂 | 21 経堂 | 22 棚所 | |
| 23 太子堂 | 24 堂（太子堂） | 宝殿 | 25 絵堂 | 26 南大門 | |
| 27 万塔院 | 28 五智光院 | 29 輪藏 | 31 短声堂 | 32 引声堂 | |
| 33 薬師堂 | 34 普門院 | 35 勝鬘院 | 36 多宝塔 | 37 庚申堂 | |

表2は全ての建物の記述について「秘密記」と「法事記」とを比較したものである。「秘密記」の二九項目の順序に合わせて「法事記」の建物を並べてみた。「法事記」建物に付した数字は、「法事記」での記述の順序である。この表を見ていくつか気づくことがある。

先ずは、先に指摘した19南大門規模の記述が異なることに加え、16聖霊院についての記述も異なっている。「秘密記／梁行五間一尺五寸」↓「法事記／梁行五間一尺七寸」と、五寸と七寸の違いである。南大門と聖霊院の二箇所建物規模の記述が異なっていることのみで、「秘密記」と「法事記」は全く無関係に成立したとは思えな

表 2

？ / 秘密記		1685 / 法事記	
1 勝鬘院	桁行・7間2尺3寸 梁行・4間2尺7寸	35 勝鬘院	桁行・7間2尺3寸 梁行・4間2尺7寸
2 宝塔	3間1尺7寸四方四面	36 多宝塔	3間1尺7寸四面
3 薬師堂 (権ノ寺)	桁行・7間1尺8寸 梁行・7間2尺4寸	33 薬師堂	桁行・7間1尺8寸 梁行・7間2尺4寸
4 普門院	4間5寸四方	34 普門院	4間5寸四方
5 文殊堂 (食堂)	桁行・10間2尺2寸 梁行・5間1尺1寸	12 食堂	桁行・10間2尺2寸 梁行・5間1尺1寸
6 六時堂	桁行・13間5尺5寸 梁行・9間2尺7寸	11 六時堂	桁行・13間5尺5寸 梁行・9間2尺7寸
7 講堂	桁行・13間1尺2寸 梁行・9間3寸	6 講堂	桁行・13間1尺2寸 梁行・9間3寸
西鐘樓堂	桁行・3間3尺6寸5分 梁行・3間2尺5寸	7 鐘樓	桁行・3間3尺6寸5分 梁行・3間2尺5寸
東鼓楼堂	桁行・3間3尺6寸5分 梁行・3間2尺5寸	8 鼓楼	桁行・3間3尺6寸5分 梁行・3間2尺5寸
8 金堂	桁行・京間8間6尺2寸 梁行・7間5尺7寸	1 金堂	桁行・京間8間6尺2寸 梁行・京間7間5尺7寸
9 五重ノ塔	京間3間5尺四面	2 宝塔	京間3間5尺四面
10 亀井水	桁行・6間3尺 梁行・3間5寸	18 亀井堂	桁行・6間3尺 梁行・3間5寸
11 東大門	桁行・6間8寸 梁行・3間5尺4寸	16 東大門	桁行・6間8寸 梁行・3間5尺4寸
12 宝堂	桁行・12間1尺2寸 梁行・4間4寸	17 宝蔵	桁行・12間1尺2寸 梁行・4間4寸
13 湯屋之方丈	桁行・7間1尺4寸 梁行・5間1尺	13 湯屋	桁行・7間1尺4寸 梁行・5間1尺
14 御供所	桁行・9間5尺3寸 梁行・5間3尺	19 御供所	桁行・9間5尺3寸 梁行・5間3尺
17 太子堂宝殿	4間5尺9寸四方	24 太子堂宝殿	桁行・4間5尺9寸四方
18 御絵堂	桁行・8間2尺7寸 梁行・2間1尺4寸	25 絵堂	桁行・8間2尺7寸 梁行・2間1尺4寸
15 三味堂	桁行・9間2尺6寸 梁行・5間2尺7寸	20 三味堂	桁行・9間2尺6寸 梁行・5間2尺7寸
16 聖靈院	桁行・7間2尺4寸 梁行・5間1尺5寸	23 太子堂	桁行・7間2尺4寸 梁行・5間1尺7寸
19 二王門	桁行・9間4尺 梁行・3間4尺5寸	3 二王門	桁行・9間4尺 梁行・3間4尺5寸
南大門	桁行・8間5尺 梁行・4間2尺	26 南大門	桁行・8間5尺 梁行・4間1尺
20 庚申堂	5間1尺2寸四方	37 庚申堂	5間1尺2寸四方
21 万塔院	桁行・7間5尺7寸 梁行・8間1尺3寸	27 万塔院	桁行・7間5尺7寸 梁行・8間1尺3寸
22 五智光院	桁行・10間7寸 梁行・4間3尺7寸	28 五智光院	桁行・10間7寸 梁行・4間3尺7寸
西重門	桁行・5間2尺5寸 梁行・3間2尺3寸	4 西重門	桁行・5間2尺5寸 梁行・3間2尺3寸
23 経堂 (輪蔵)	4間6尺四方	29 輪蔵	4間6尺四方
24 西門	桁行・6間2尺6寸 梁行・3間5尺	30 西門	桁行・6間2尺6寸 梁行・3間5尺
北引声堂	桁行・5間3尺5寸 梁行・3間2尺1寸	32 引声堂	桁行・5間3尺5寸 梁行・3間2尺1寸
25 南短声堂	桁行・7間3尺5寸 梁行・6間	31 短声堂	桁行・7間3尺5寸 梁行・6間
26 石鳥居	(規模の記載なし)		
27 安居天神	(規模の記載なし)	記述なし	
28 一心寺	(規模の記載なし)		
29 恵美須 (今宮)	(規模の記載なし)		

い。「秘密記」と「法事記」、三〇棟の建物のうち、南大門と聖霊院を除く二八棟の建物規模の記述が一致していることこそ注目すべきであろう。

二点目は、「秘密記」の記述順序と「法事記」のそれとが、全く異なっていることである。このことは、「秘密記」と「法事記」が同一の元資料を見ていながらも、それぞれの編者は独自の判断基準により、その基準に従って記述する建物の順番を決めたのであろう。

三点目は、「秘密記」には26項目以下に石鳥居・安居天神・一心寺・恵美須の四項目があるが、「法事記」ではこれらの項目がないことである。「秘密記」では項目はあるものの、建物規模の記述はない。このことは、「秘密記」・「法事記」が独自に記述すべき項目を選択しているのである。

いずれにしても、「秘密記」と「法事記」は、同一の元資料から、それぞれが編集・作成され、どこかの段階でのミスが生じ、南大門と聖霊院の建物規模の記述に違いが生じてしまったと考えられる。

五 「秘密記」と「法事記」の建物数値の背景

「秘密記」「法事記」の建物数値はいつの状況の数値を記述しているのか、四天王寺伽藍の状況を見ておきたい。⁷⁾

一六一四年（慶長一九）一月六日

大坂冬の陣に巻き込まれ、四天王寺は、大坂方（豊臣方）の放った火により炎上焼失。

一六一五年（元和元）六月一日

大坂の陣に勝利した徳川家康は伽藍復興の命を下す。

一六一八年（元和四）九月二日

伽藍復興の新始め。

一六二三年（元和九）八月十九日

伽藍造営成就。御普請奉行から諸堂社並びに仏具・

神宝・法衣などが引き渡される。↑「改渡帳」

一六二三年（元和九）九月二日

伽藍再興、成就。

一六六九年（寛文九）二月二日

徳川家綱、伽藍修理を厳命する。新始め。

一六七〇年（寛文一〇）八月二二日

伽藍修理、成就。

一六八五年（貞享二）二月

「法事記」刊行。

このように時系列で見ると、「改渡帳」は大坂の陣で焼失してしまった伽藍が、一六二三年（元和九）に再興された時に「御普請奉行から四天王寺の寺僧衆へ堂塔から仏像仏具などいっさいがっさいが引き渡された時の記録⁸」であり、確實・正確な記録である。

一六二三年に再興された伽藍も、時間の経過により修理が必要となったようで、四六年後の一六六九年（寛文九）から工事が開始され、翌一六七〇年に修理が終了する。修理によって少しながら諸建物の規模が変化し、修理後の建物規模の数值が「秘密記」＝「法事記」記述であることは明らかであろう。

したがって、「秘密記」の成立上限は一六七〇年（寛文一〇）であることは明らかである。下限については、書写された一八一一年（文化八）までの間である。

六 まとめにかえて

「秘密記」について他史料と比較して成立年代を検討してきた。

建物規模の数值から「秘密記」は一六八五年（貞享二）に刊行された「法事記」と同一の資料を用いていることが判明した。「秘密記」と「法事記」に記述された建物規模の数值は、一六七〇年（寛文一〇）に修理・完成した数值と考えられることも判明した。

「秘密記」の成立年代は伽藍の修理が完成した一六七〇年以降、中之島本が書写された一八一一年（文化八）までの間としか現状では言いようがない。

各建物の後に続くセクシャルな記述について、私には考察する力は全くない。諸賢の検討を願うのみである。

おわりに

大阪府立中之島図書館にて『四天王寺秘密記』を手にした時の印象は「何とも不思議な変な本」であった。中之島本が唯一の写本であるためか、四天王寺の研究で用

いられておらず、まずは成立年代を明らかにできないだろうかと考えた。

四天王寺の研究においては長谷川輝雄「四天王寺建築論」(『建築雑誌』四七七号 一九二五年)という優れた研究がある。小文も長谷川氏の方法をなぞってみた次第である。

なお蛇足ながら、一七三七年(元文二)に四天王寺名跡集』(大日本仏教全書 寺誌叢書二)、一七三九年(元文四)に『四天王寺伽藍記』(国文東方仏教叢書 寺志部)が刊行されている。いずれもやや通俗的な内容である。『四天王寺秘密記』もこのような雰囲気の中で書かれたのではないと思うが、これは実証できない。

註

- (1) 棚橋利光編『四天王寺年表』(清文堂 一九八九年) 八一一年(文化八)八月の項目に「慶長十八年三月に書かれたとする『四天王寺秘密記』(一冊)書写される(中之島図書館蔵本)」とある。
- (2) 棚橋利光編『四天王寺古文書』一卷(清文堂 一九九六年)。

- (3) 棚橋利光編『四天王寺古文書』一卷。
- (4) 棚橋利光編『四天王寺史料』(清文堂 一九九三年)。
- (5) 棚橋利光編『四天王寺史料』。
- (6) 棚橋利光「解題 四天王寺法事記」(『四天王寺史料』)。
- (7) 棚橋利光編『四天王寺年表』による。
- (8) 棚橋利光「解説 天王寺御建立改渡帳」(『四天王寺古文書』)。





























